

2010. 12. 28

この夏に出版された「国際会計基準（IFRS）はどこへ行くのか」（田中弘著）を読んだ。いかにもグローバルスタンダードのように響く国際会計基準だが、実はもはや「ものづくり」で稼げなくなつた金融資本中心主義の英米が世界を巻き込もうとする国家的戦略であつたと、同書は指摘している。

大機小機

長期の視点から日本のあるべき姿について問題提起をしてお示唆に富む。会計問題の本質を考えさせてくれる本であつた。

円高や税負担を含めたコストの高さから、日本のものづ

くり企業は海外シフトを迫られている。これに伴い、100万人以上の雇用が失われているともいわれる。日本はものづくり立国でなければ、やがて沈没してしまう。会計制度もものづくりのグローバルメーカーがしっかり議論を重ねて、慎重に事を運ばねばな

ものづくり企業の経営と会計

らないだろう。自社だけでなく、日本企業のあり方を踏まえ、スタンスを決める必要がある。

同時に企業経営者が肝に銘じなければならぬのは、会計は企業の姿を映す鏡にすぎないということである。仮にIFRSが導入されたからと

いて、経営の本質が根本的に変わってしまうとすれば本末転倒である。

確かに利益の計算方法が変わるので、従来の利益とは異なるものが算定される。過去に時価会計、減損会計などが導入された際にも、企業の経営は相当地に揺れてきた。

だが、株式会社としての企業の最終的な目的は株主財産を増やすことである。計算上の利益ではなく、株主が手にするのは実質的な財産の増加である。これはキャッシュフロー（現金収支）によって測られる。

つまり経営の究極の目的

は、将来キャッシュフローを最大化することにある。そのため今、何をすべきかというのが企業のマネジメントである。

「利益はポリシー、キャッシュフローはキング」といわれる。会計制度がいかに変わろうと経営の目的は将来キャッシュフローの最大化なのである。このことを経営トップはよく認識したうえで臨まなければならない。

IFRS問題にどう対処し、経営判断をしていくか。経営トップの覚悟とともに、制度と経営をつなぐ最高財務責任者（CFO）と実務部隊の役割が求められるところである。

（五月）